

ひる 昼のにおい

ちち おも だ き れんそう なつ ゆうがた ちち
父のことを思い出すと、決まって連想するにおいがある。夏の夕方、父
きたく あに わたし にわ よ だ にわしごと てつだ
は帰宅すると、兄と私を庭へ呼び出して、庭仕事を手伝わせた。「ここは
こんなふうに…」と指示されるままに、ふたりは汗まみれになって草を抜き
つち はこ つか おも はじ はん はは こえ
土を運んだ。疲れたなど思い始めたころに「ご飯ですよ」と母の声がす
ちち さいご みず て あら しょくじ い
る。父が「最後に水をやって、それから手を洗って食事しましょう」と言う
と、そのとき、「昼のにおい」がした。

せいかく ひる お い いちにちじゅうつよ ひ
正確には、昼の終わりのにおいとでも言うべきだろう。一日中強い陽
や くさき みず え い かえ かわ き つち
に焼かれた草木が、水を得て生き返るにおい、それとも、乾き切った土
が、ごくごくとのどを鳴らして水を飲むにおいだったのだろうか。どちらに
にわしごと かいほう あに かお み あ
しても、ようやく庭仕事から解放され、兄と顔を見合わせてにっこりうな
あ わす
ずき合うときの、忘れられないうれしいにおいであった。

てつだ れい ゆうすず きげん
手伝いへのお礼のつもりもあったのだろう、「夕涼みがてら…」と機嫌の
ひ ちち わたし にわ つ だ はなび はなび
いい日の父は、私たちを庭へ連れ出し花火をした。もっとも、花火といっ
とうじ う あ はなび とお ひと おどろ
ても、当時のことだから、打ち上げ花火や、通りがかりの人を驚かせるほ
おお おと だ もの すがた こし お ちち
ど大きな音を出す物はない。ゆかた姿でゆったりといすに腰を下ろす父
ところ はなび も い ひ さいご ちち い
の所へ、花火を持って行き火をつけてもらおう。「これが、最後」父がそう言
ひ いっほん き ひ はな み
って火をつけてくれた1本が消えると、それまで火の花をじっと見つめて

いた目には、一瞬^め 辺り^{いっしゅんあた} が暗^{くら} やみになってしま^{しゅんかん}う。その瞬間^{いちど}、もう一度

「昼^{ひる}のにおい」がした。子供^{こども}の時間^{じかん}が終^おわ^{すこ}る少しさびしいにおいだった。

昔^{むかし}のこ^{おぼ}とをすべて覚^{なに}えているわけではないが、何^{なに}かがき^なっかけになっ

て、ふ^{おも}と^だ思い出^{ちち}すこ^なうことがいくつ^{ねんあま}かある。父^{こども}が亡^なくな^{ねんあま}って10年^{こども}余^{ねんあま}り。子供^{こども}た

ちにね^こだ^られ、とき^{こうえん}ど^{いっしょ}き公^{はなび}園^{はなび}で一^{こども}緒^{おも}に花^{はなび}火^{こども}を^{おも}する。花^{はなび}火^{こども}は子^{おも}供^{こども}た^{おも}ち^{おも}に^{おも}も思^{おも}

い^で出^{のこ}として残^{おお}るの^{なつ}だ^{おも}ら^だうか。大^おき^なく^なつ^つて懐^{おも}か^だしく思^{おも}い^だ出す^だのはど^だん^だな^だこ

と^だら^だうか^だと、楽^{たの}し^こそ^{ども}う^すな^が子^{ひる}供^{おも}た^{おも}ち^{おも}の^{おも}姿^{おも}を^{おも}眺^{おも}め^{おも}つ^{おも}つ、^{おも}「^{おも}昼^{おも}の^{おも}に^{おも}お^{おも}い^{おも}」^{おも}を^{おも}思^{おも}

い^だ出す^だ。